

ディレクターメッセージ

初夏の候、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

日が長くなったなと感じたのは、二十四節気で『夏至』と呼ぶ日でした。夏の企画のために訪ねた、京都府福知山から戻る車窓から、外を眺めているときのことでした。6月下旬は1年を4分割した最初の3ヶ月「第1四半期」が終わる頃となります。4月からの活動が上手く推移しているか確認し、7月からの「第2四半期」の準備をする頃と重なります。

そんな「第1四半期」後半に5冊の発行物を2018年度の取り組みをお伝えするレターと共に送らせていただきます。申すまでもなく、我々の発行物はコレクターズアイテムではありません。実用書、報告書の類です。ぜひ、ご一読いただき、感想、更には示唆に富んだご指摘を頂ければ幸いです。

さて、この間の成果として、1)「東京アートポイント計画」では、公募から2事業を採択し、今年度は10団体と共催事業を展開します。2)人材育成事業「Tokyo Art Research Lab (TARL)」では、東京アートポイント計画との連動性を強めた新構成の学校プログラムの準備が整いました。3)我々の活動をお伝えする発信プログラムの拡充に取り組みしました。

この過程で、プログラムオフィサー(PO)チームは、意識的に「創る」を軸に据えた議論を展開してきました。「為る」ではなく「造る」を行動指針に、情報を「知った」だけでなく、理解を伴う「判った」をベースに、各事業が連動しあうあり方を創っています。

7月29日にはArtpoint Meetingの6回目を開催します。会場でみなさまにお会いできるのを楽しみしています。

『小暑』『大暑』と益々暑い日が続きます、ご自愛ください。

アーツカウンシル東京 東京アートポイント計画 ディレクター



あ び

OVERVIEW | 2018年度の取り組み

東京アートポイント計画

東京の地域社会を担うNPOとアートプロジェクトを実施し、NPOの活動と組織の両面を支援する取り組み。

10年目の、その先をつくる

今年度は8事業の共催でスタートし、7月より公募で選出された2事業が合流します。公募開始から3年目を迎え、初年度に参加した「東京ステイ」と「Betweens Passport Initiative」は事業の成果を紡ぎ始めています。今回お届けした『Krishna—そこにいる場所は、通り道』は、そのひとつです。イベントシリーズ「Artpoint

Meeting」は7月に「拠点」、1月に「メディア」をテーマに開催。アーツカウンシル東京のウェブサイトでの「プロジェクトインタビュー」シリーズの更新、毎月のメールニュース配信、facebookページ運営も継続し、積極的な情報発信も行います。10年の蓄積を後押しとして「その先」の活動をつくり続けます。

tarl TOKYO ART RESEARCH LAB

アートプロジェクトを実践する全ての人々に開かれ、共につくりあげる学びのプログラム。

「つくる」ための環境をつくる

スクールプログラム「思考と技術と対話の学校」とスキルの検証や確立を目指す「研究・開発」、3331 Arts ChiyodaのROOM302を「拠点」として活用するプログラムを展開。スクールプログラムは「つくる」という視点をより意識した内容に発展を試みます。これからの時代を見据え、いまどんなアートプロジェクトが求められ

るのか。それを実現するには何が必要なのか。これまでの成果の検証、東京アートポイント計画とも連動し、『10年史』の制作も行います。ウェブサイト(tarl.jp)を情報集積と発信の拠点とし、アートプロジェクトの現場をつくるための基盤整備に取り組みます。

ART SUPPORT TOHOKU-TOKYO

東京都による芸術文化を活用した東日本大震災の被災地支援事業。

先を見据えて、いまに触れる

東日本大震災から8年目を迎え、東北3県で6事業を展開予定です。事業継続から見えてきた地域への定着のありかたを模索し、同時に2021年3月の震災から10年目も見据え、「いま」取り組むべき議論に着手していきます。事業実施だけでなく、過去に

共催してきた事業の成果の確認やアーカイブ活動にも取り組みます。都内でのトークセッションの開催、年内にはジャーナル『FIELD RECORDING』の第2号を発刊など、ここ数年で活発化させてきた東京側の活動も、さらなる展開を試みます。

Words Binder 2018 / Box+Letter

発行日 | 2018年6月29日 アートディレクション&デザイン | 川村格夫

発行 | アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団) 〒102-0073 東京都千代田区九段北4-1-28 九段ファーストプレイス8階

Tel: 03-6256-8435 Fax: 03-6256-8829 E-mail: info-ap@artscouncil-tokyo.jp URL: https://www.artscouncil-tokyo.jp

©2018 Arts Council Tokyo *本誌はTokyo Art Research Lab研究・開発プログラムにて制作しました。

Words Guide 2018

今回お届けした冊子やアーツカウンシル東京のブログ記事の中から、新たに生まれた「ことば」をご紹介します。

私たちが夢を持った存在だということを忘れないで欲しい。彼女のそんな思いが切実に伝わってきた。同時に、この社会は夢を持てる場所なのかと、自分が問いかけられているように思えた。

「Krishna—そこにいる場所は、通り道」
Betweenstとの出会いの終わりに—— 編集後記に代えて

「Betweenst Passport Initiative」は『移民』の若者たちを異なる文化をつなぐ社会的資源と捉え、アートプロジェクトを通じた若者たちのエンパワメントを目的とするプロジェクト。かぎ括弧にいれた『移民』とは「多様な国籍・文化を内包し生活する外国人」を指します。これからプロジェクトを共にする人々へ、日本社会では見えにくい彼ら／彼女らの現状や、異なる文化の「間(はざま)＝Betweenst」に生きる姿を伝えるために『Krishna—そこにいる場所は、通り道』は制作されました。書名は本書に収録した写真家のGottinghamとのコラボレーション作品のタイトル。Avinash Ghaleというひとりの若者と未完の映画「subash(スパス)」との出会いを契機に生まれた本書には、さまざまな位置から見える「Betweenst」へのまなざしと声を収録しています。

アートプロジェクトを通じた文化的な機会や経験が、地域に浸透し、日常を浸食して、風景や生活の一部になるような事業は、今までにはなかった。だから、東京でこういうことが生まれている文化的意義は大きいと思います。

『東京アートポイント計画 2009-2016 実績調査と報告』鼎談 結果を踏まえて

2009年度に始動した「東京アートポイント計画」は、2018年度に10年目を迎えます。その節目を前に特定非営利活動法人アートNPOリンクと協働し、本事業の成果を調査検証しました。これまで記録・アーカイブ、調査・検証に力をいれてきたTokyo Art Research Lab 研究・開発の一環として実施。

『東京アートポイント計画 2009-2016 実績調査と報告』は、これまでの事業実績のデータ分析、アンケートと5組の共催団体の方々へのインタビュー調査、その結果を踏まえた調査メンバーによる鼎談を収録しています。複数年にわたって続いてきたからこそ見えてくる成果や問いかけの数々がインタビュー等の言葉には現れています。2018年度は「Tokyo Art Research Lab」の調査検証も試みます。

島に帰ってくるとほっとします。落ち着くんです。

「HAPPY TURN / 神津島通信01」

人間の旅とは、いまそこにいたくてもいることの出来なかった人々の、期待があってはじめて可能になるのです。その意味で、わたしたちの創造の旅とは、他者の希望の上にあります。

「芸術祭ノート」[資料] あいちトリエンナーレ2016 芸術監督テキスト

「被災者」とは誰なのだろうか。「被災地」とはどこなのだろうか。震災後の東北に通い、そう問えば問うほどに、そんな「」で括るような人も場所も存在しないのだと気が付いた。「被災」とは個々人の経験の襲のなかにあった。だからこそ、抽象的な枠組みに囚われるのではなく、目の前の具体的な出来事に目を凝らす態度が求められた。「アート」の作法を介して向き合う現場は常にそうした「」を外した先から始まっていった。

「目の前の風景に、踏み止まり続ける(下) — Art Support Tohoku-Tokyo 7年目の風景(9)」(アーツカウンシル東京ウェブサイト)

いま、東京からできることがあるのだろうか。2011年の東日本大震災を契機とした、この問いかけから始まったArt Support Tohoku-Tokyo。震災から8年目を迎え、事業を続けてきた、いまだからこそ東京からできることを試みています。2016年度にインタビュー集『6年目の風景をきく』を発刊し、2017年度にはジャーナル『FIELD RECORDING』を創刊しました。ブログ連載記事「7年目の風景」は事業の進行と並走しながら書き継いできました。いまま変化を続ける東北の風景を観測し続けるため、2018年度もウェブサイトを通じた情報発信を続けます。

“良いこと”をしている気分で文化やアートをやっても、何にもならない。と“私”は考えています。この、“私”という主語が大切なんです。

「やってみる、たちどまる、そしてまたはじめる 小金井アートフル・アクション! (小金井市芸術文化振興計画推進事業) 2009-2017活動記録」[座談] “展示”から“窓”に—「かがわ工房展」から生まれるもの

小金井アートフル・アクション!は2009年度に小金井市が芸術文化振興計画を策定したことから始まりました。正式名称は小金井市芸術文化振興計画推進事業。2018年度は事業開始から10年目を迎えます。時系列もばらばらに個々の現場に通底する価値を軸に編集された『やってみる、たちどまる、そしてまたはじめる 小金井アートフル・アクション! (小金井市芸術文化振興計画推進事業) 2009-2017活動記録』は、その10年の軌跡が収録されています。何を狙い、どうつくり、どんなことが起こったのか。多種多様な記録、関係者の声、写真やテキストが重層的に重なりあい、小金井での実践のさまざまな価値を「発見」できる1冊です。